

南アフリカにおける分断統治とアフリカ人の主体的な民族意識の表明
—クロムドゥラーイ住民にとっての「ソト人であること」—

津田塾大学大学院国際関係学研究科後期博士課程

河野明佳

アパルトヘイト体制下の南アフリカにおいて、アフリカ人は「人種」によって差別されただけでなく、さらに下位単位として 9 つの「民族」に区分され、それぞれの「民族」別居留地に帰属することが法律によって強制された。アフリカ人の「民族」別居留地はホームランドと呼ばれ、各「民族」はそこでアパルトヘイト体制の許す範囲での自治が与えられた。1970 年代以降先鋭化していったこのようなアフリカ人に対する分断統治は、解放闘争主流派の活動家だけでなく、アパルトヘイトに対して批判的姿勢であった研究者たちからも、アフリカ人の分断を助長するものとして激しい批判の焦点とされた。また民族的な帰属意識に基づく主張を行うアフリカ人も「部族主義」と捉えられ、アパルトヘイト体制を支える「協力者 (collaborators)」として非難された。

「不法占拠区」クロムドゥラーイ (Kromdraai) は、このような分断統治の下、1970 年代に「ツワナ人ホームランド」タバ・ンチュ (Thaba Nchu) に流入した人びとによって形成された地である。クロムドゥラーイ住民は、白人農場の機械化により職を失い、行き場を失った人びとであり、「自分の土地を持てる」という噂をききタバ・ンチュにやってきた。しかしタバ・ンチュでは「ツワナ人ではない」ことを理由にホームランド政府から暴力的迫害を受けた。そのような状況にも負けず、彼らは「不法占拠区」クロムドゥラーイに住みつき、劣悪な生活環境を改善するために住民同士が協力しながら活動した。クロムドゥラーイ住民は、「ソト人」という「民族」名を表した委員会を結成し、「ソト人ホームランド」に支援を要請した。クロムドゥラーイにおける「ツワナ人ホームランド」政府と住民との対立は、「ツワナ人とソト人の民族対立」として、先行研究において理解されてきた。

本報告では、旧クロムドゥラーイ住民へのライフヒストリーの聞き取りから、クロムドゥラーイ住民にとっての「ソト人であること」の意味を考察する。クロムドゥラーイ住民は、農業労働者として長年散在していた人びとであり、また民族的な帰属意識ではソト人だけでなく多様な集団であったと言える。歴史や文化、血縁的紐帯を共有しない彼らにとって、クロムドゥラーイという「場」で直面した「ツワナ人ホームランド」からの暴力的迫害、劣悪な生活環境という問題こそが互いを結びつけるものであった。住民の語りの中から、クロムドゥラーイ住民が表明した「ソト人」という「民族意識」が、生活環境改善のための道具主義的側面を持つ一方で、多様な人びとを包含し互いに支えあい問題に取り組んでいく中で共有された開放的な新たな意味があっ

ドゥラーイという「民族対立の場」において、住民がアパルトヘイトの分断統治の枠組みを主体的に内面化し表明した「ソト人である」という「民族意識」の実態を示すことを目指す。先行研究で資源をめぐる排外的な「部族主義」が先鋭化していったと理解されてきた、ホームランド体制下の民族混住地域における民族的帰属意識の理解へ、新たな視座を提示できると考えられる。